

2017年 11月 10日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

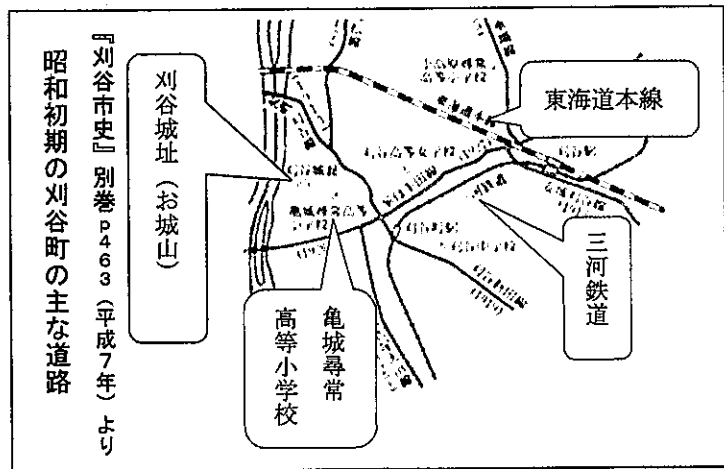
二〇一七年十月の「森三郎の作品を読む会」では、九月に引き続き、「城下町」の後半を読みました。

一九四六年、復刊第一号の「季刊新児童文化」に発表された「城下町」の後半は、医王門という門を一つ残して、崩れかけていた旧城が取り壊され、その址が町のグラウンドになったこと、町はずれに大きな紡績会社が出来たこと、小学校の創立五十周年記念式が行われたことなど、森三郎の尋常小学校の頃、大正時代の刈谷の歴史と重なる記述が見えます。

また、『赤い鳥』に発表した森三郎の作品の中で使われていたモチーフが見られることも特徴的でした。お母さんに頼まれて「玄米パン」を買いに行った主人公は、そのおつりでシュークリームを買い食いしてしまいます。そしておつりを落としたことになってしまいますが、この時に感じる罪悪感とは、「水差」（一九三五年一月号）にも描かれていたことです。また、せつかくもらった小銭をつまらないことに使ってしまった後悔を描いた「ワッフル焼」（一九三四年六月号）や、おつりを落としてしまったて探しに行こうとするが夜道がこわくて戻ってきてしまう少年を描いた一九三六年十一月号（鈴木三重吉追悼号）の「三味線橋」など、小銭にまつわる話は『赤い鳥』掲載作品の中にいくつもありました。

もう一つ後半の大きい特徴は『赤い鳥』一九三四年三月号の「角兵衛獅子」の話を、「城下町」に取り込んでいることです。風邪をこじらせて長く欠席した後、登校すると受け持ちの先生に「もう直ったの。」と肩をたたかれて涙が出るほどうれしくなった部分は主人公の叔父さんの先生に変え、重要な舞台である「カルピスの看板」が立っていた山を、お城山に変えています。そして「山の向う側を汽車が

通りますので、お客の目につくやうに立てたものでせう。」と言っています（左図参照）。また、新たに「角兵衛獅子の悲しさは 親が太鼓うちや子がをどる」で始まる、竹久夢二の「越後の山」の詩（『春のかはたれ』洛陽堂 1912年発行）が入っていて、「宗之助に赤い灯の思い出があるやうに、今の二人はどんなものがあるのでせう。」と、角兵衛獅子の兄弟のことを思いやっています。



この「赤い灯」というのは、長く伸びた白い道を、遠くの親しげな赤い灯を身ながらお父さんとお母さんに手を引かれて歩く主人公の幼い日の

夢とも幻ともつかぬ思い出の象徴です。この「赤い灯の思い出」の描写が「城下町」の物語の冒頭と結びの部分をやさしく包んでいます。実はこれと似た場面の夢の話が兄・森銃三の「白い道」（初出『笹』一九三六年十一月号、『森銃三著作集続編』第十五巻所収）という作品にもあって、兄弟のよく似た思いが伝わってきます。「城下町」は、東京での『赤い鳥』時代の集大成と、戦後、変化した城下町に戻って住むことになった作者・森三郎の覚悟とが集結された作品と言ってよいのではないのでしょうか。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）

12月8日（金）午後1時半～3時半

『赤い鳥』昭和六年十月号「夢買ひ」、十一月号「三條中納言」、

十二月号「羅生門」「かささぎ物語」を読み返します。